

「これからの時代に求められる能力とはそもそも何であり、
それを育成するために教育はどうあるべきか」

教育再生実行会議
第1分科会第2回

2014年11月17日（月）
株式会社インテカー 代表取締役
内閣府本府参与
齋藤ウィリアム浩幸

はじめに

前回第1分科会の初回会合でも、やはり「これからの時代に求められる能力とはそもそも何であり、それを育成するために教育はどうあるべきか」という観点からプレゼンテーションをさせていただきました。

そのため、前回配布済みの資料5内に多くは書きこんでおりますので、今回は、資料5からの抜粋（必要であれば前回資料をご参照いただけるようナンバリングは残しております）と、若干の追記をもって、提出資料とさせていただきます。

①グローバル人材の資質、養いたい力とは

（第1分科会第1回配付資料5内番号〔以下同様〕2-1）

人工知能に負けないためには、人間にのみ備わった能力を養う必要がある。「**隠喩する力**」メタファー（Metaphor）と「**類推する力**」アナロジー（Analogy）、「**創造力**」（Creativity）と「**想像力**」（Imagination）だ。日本の教育が重視してきた適合性・従順性・規則性から脱却。変化の早い不確定な時代にあっては視野の広い柔軟な人材が求められる。

②イノベーションとは（2-2）

そもそもイノベーションとは何か。それは、科学と技術とデザインの融合である。まず世界に通用する価値あるものを創り出すためには理系・文系をバランスよく融合させる必要があるだろう。ルールの上を進んだ先に用意されたスペシャライゼーションからは、イノベーションは生まれない。イノベーションとは、ルールの中で効率性を上げていく努力のことではなく、ルールそのものを変えてしまうような独創的なアイデアの実用化のことをいう。

③失敗という貴重な不成功体験を積む（2-3）

イノベーションを起こすためには不成功体験が必要だ。それも、多くの失敗をすることが重要。失敗することは、なにも特別なことではなく当たり前のことであり、失敗をしてはならないという強迫観念や羞恥心は不要である。とはいえ、社会に出て仕事のなかでの失敗はやはり推奨しがたい。だからこそ、教育課程の間に、失敗から原因を分析し次につなげる多くの体験をしておくことが

肝要なのである。うまくいくようにフォローし、成功体験をさせることも自信をつけるためには重要であるが、それだけでは不十分であり、失敗したときにどう這い上がるかを、ワザと上手くいかないよう妨害をしてでも体験させる教育が必要だ。

また、もともと探していたものとは別の偶然の「幸運を掴みとる力」(Serendipity)は失敗をプラスにとらえなければ絶対に身につかない。

④ボランティアとホビーで育まれる能力 (2-6)

イノベーションを起こすために有用なのがボランティアとホビーである。受験で忙しい子どもには一見時間の無駄に思えるかもしれないがようだが特に大切なことだ。

子どもはボランティアをすることで身体的、社会的に自分より弱い人がいることを知り、人々の多様性を実感できる。つまり、ボランティアをすることによって助ける・助けられる、双方の立場を理解する。そして、自分が困っているときには助けを求めていいということを認識する。弱さは決して格好悪いことではない。いざというときに「他者に助けを求める力」も世界で活躍する人材には身に着けておいてほしい力である。

そして、ホビー。ここでいうホビーは段など資格を取るための習い事ではない。組織的なピラミッド構造の中で段を取って競争させるようなものではないということだ。ホビーは強制されるものではなく好きなことを自発的に行う行為だ。

成功者は3種のホビーを持っていると言われている。工芸など手先を使う(Craft)ホビー、スポーツなど体を使う(Physical)ホビー、クロスワードパズル、囲碁将棋など頭を使う知的(Mental)なホビーだ。異なるホビーを持つことで「課題解決能力」を養い、同時に思わぬ人と思わぬホビーで繋がるなど人間関係を広げる機会にも恵まれる。仕事ではないので失敗しても問題ない。失敗をむしろ楽しむことができるというのがホビーの利点だ。工夫や失敗を繰り返かえす中で「応用力」「展開力」がついてゆく。

人間にしかない知力であるメタファー「隠喩する力」やアナロジー「類推する力」を養うのもホビーである。人はメタファーとアナロジーを駆使して新しい概念を説明する。いくつかのポイント、エッセンスが一致していれば類似性を捉え別の言葉で言い表すこともできる。単なる知識ではなく、ホビーやボラン

ティアを通して得られる体験から、多くの類似性をストックする。

ボランティアやホビーは知識や情報など机上の学習と異なり、自分で実際行い、実践的に学ぶ格好の機会である。子どもたちは経験を積むことで人間性が豊かになる。多様な人々との交流から、コミュニケーション能力を養う。様々な刺激から、社会に目が向き、自分の将来のビジョンに向かってパッションをもって生きていくことができる。人との交流の中ではリーダーシップも養うこともできる。そして、様々な経験から「**危機管理能力**」も培われる。

ホビーとボランティアは人間にしかできない文化（Culture）活動のひとつだ。人間はサルとのわずかな遺伝子の違いから、ただ単に生きていくこと以上のことができるようになった。人が生きる意義がまさにここにある。文化的な活動の中で達成感を得て、さらに幸福（Happy）を追求する。それはビジョンとパッションを生み出す原動力になる。

⑤アントレプレナーはパッションとビジョンを持っている（2-7）

グローバルな人材はイノベーションを起こすアントレプレナーだ。では、アントレプレナーとはどういう人か。アントレプレナーは元来、起業家（Venture）ではない。イノベーションを推進する(Do)人、アイデアを実現(Do)する人という。そして、アントレプレナーはパッションとビジョンを持っている。学校教育の中でこのパッションとビジョンを持つ力、そしてそれらを「うまく伝える力」(Presentation)を育てる必要がある。

日本の子どもたちを見ていると、ハングリーさが乏しく、夢がないように見えるのはなぜか。与えられた課題をそのとおりにこなす、知識だけを詰め込む勉強がパッションやビジョンを殺していないか。もし、ハングリー精神があれば、子どもは自然とビジョンを持つようになる。

一人一人が違って当たり前という前提のもとに、異なる意見を交換しながら、より高い価値を紡ぎ出す力、当事者意識を持って自分の人生を切り開いていく「生きる力」を養う大切な時期だからこそ“なぜ勉強しなければいけないか”という問いに答えられる教育が求められる。

ある一つの答えを求め、それに同意を求めるような授業ではなく、問題に対する答えが幾通りもあるような課題を問うて、子どもに考えさせ、皆がそれぞれの意見を出しやすくする。自ら課題を発見して、他者の力を借りながら解決策

を模索していく。まさにリアルワールドで求められている力はそれである。社会と学校教育過程を隔絶する必要は無く、実社会で必要な力を、社会に繰り出す準備段階である学校教育過程で育むべきことは誰も反対しないだろう。勉強には強いという漢字が使われるが、自ら問いを立てて探求する学問こそ、高等教育では求められるはずだ。

教師は一方的に教えるのではなく、学び方を教える。小学校の低学年から図書館でどうやって調べるか、どうやってレポートにまとめるかなど、自分で調べまとめる「学ぶ力」をつける。それを皆の前で発表（Presentation）し、意見を交わす（Debate）ことでより深い学びを享受する。パッションとビジョンがあれば相手を納得させることもできるだろう。

なお、「コミュニケーション力」や「プレゼンテーション能力」というと、滑舌、視線、表情、姿勢、ジェスチャーを数回のレッスンやセミナーで習得するものをイメージしがちであるが、最も重要な要素は声である。

通常、人は習わずとも発声できてしまうため、発声法を特に意識することなく声を発し、使い続けている。しかし、メッセージを伝える媒体として、一人ひとりの身体本来の声の響きを取り戻すためには、元来、新しいスポーツを始めるときのように、今までにない体の動きを覚え、それを繰り返し行う身体的なトレーニングを要する。

自分の声に自信を持ってない日本人が多いのも事実で、声の出し方を学ぶことで、自分自身を知り自信のある声を効果的にかつ無意識レベルで扱うことができるようになれば、有効なプレゼンテーションやリーダーシップを発揮できるようになる。そういった意味で、たとえば、声の出し方（音階に合わせて声を出すいわゆるボカルトレーニングではなく、文字通りボイストレーニング）を、コミュニケーション能力を高める基本スキルとして学校教育内で実践することは、日本人のパフォーマンスを底上げする波及効果の高い手段ではないか。

⑥危機管理能力を養う（2-8）

人はかならず間違えるものだ（To error is human）。万全を期して、事故を未然に防ぐことばかり拘泥すると、いざという時に呆然と立ちすくんでしまう。東日本大震災から日本人が共有した教訓である。自然災害による想定外・例外の危険にさらされたときに、どのように対処するか普段から検討し合う鍛錬をすることが必要だ。平時よりもコミュニケーションが重要になる危機的状況の中でどうやって現状復帰するか、普段の授業で例外事象を想像させ、どう行動し

たらよいか意見を交える。多くの意見が出ればそれだけ多様な選択肢を用意できる。訓練の過程でリーダーシップを発揮し、協力して問題解決を図り「**実行する力**」を養う。「**危機管理能力**」を身につけるには答えは一つではないという発想が求められる。

以 上